

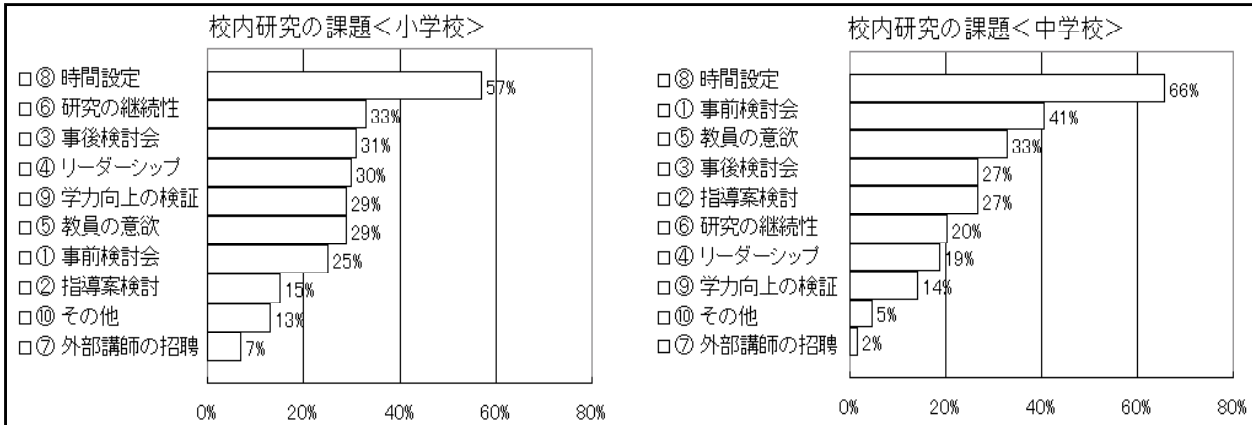
平成24年度 校内研究に関する質問紙調査集計結果分析

小学校100校（新任研究主任・新任教務主任対象 調査期日：平成24年5月28日，6月15日）

中学校64校（新任研究主任・新任教務主任対象 調査期日：平成24年6月7日，6月15日）

（1）調査項目ごとの集計結果から

1 校内研究を進める上で課題となっていることは何ですか。

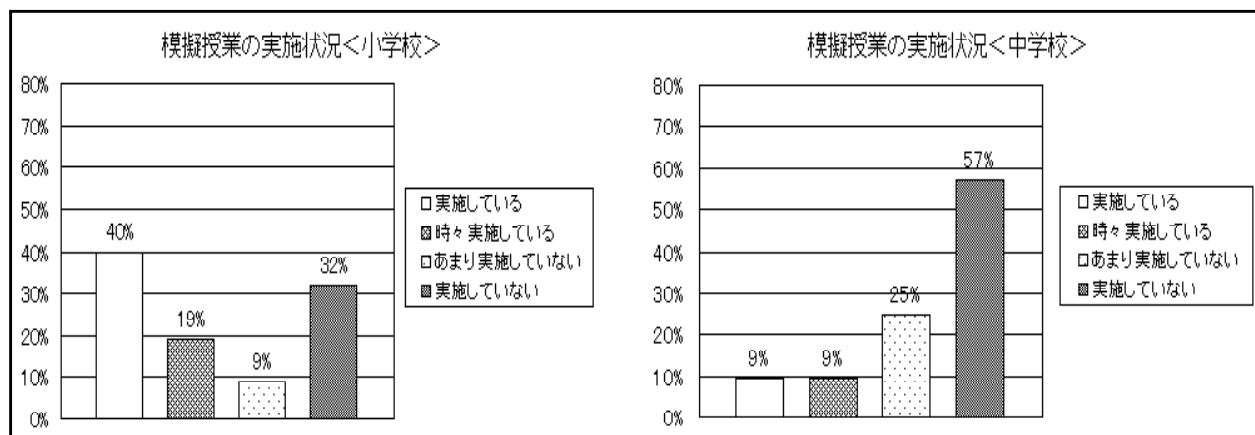


【その他の記述】（抜粋）

小学校	中学校
<ul style="list-style-type: none"> 研究の方向性，内容，成果の共有化 効果的な取組を全校に広げられない 研究内容の深め方と指導力向上へのつなげ方 	<ul style="list-style-type: none"> 各事業と校内研究との関連

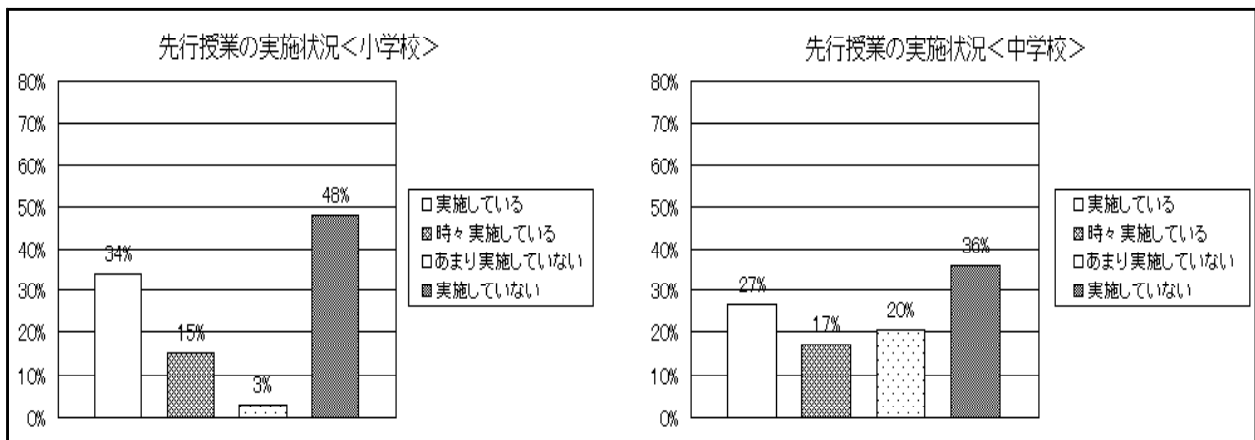
結果と考察	
小学校	中学校
<p><結果></p> <ul style="list-style-type: none"> 約6割が時間設定に課題を感じている。 研究の継続性が，課題として2番目に多い。 <p><考察></p> <ul style="list-style-type: none"> 会議や出張，行事等との絡みで，設定に苦労していることがうかがえる。課題として2番目に多いことから，時間的な要因に左右されずに研究の継続性が図られる工夫をしなければならないことが分かる。 	<p><結果></p> <ul style="list-style-type: none"> 約7割が時間設定に課題を感じている。 約4割が事前検討会のもち方や内容に課題を感じている。 <p><考察></p> <ul style="list-style-type: none"> 多忙感のある中で時間の設定に苦労している様子がうかがえる。中学校においては，部活動の指導もあり，研究授業を行うために全員で集まることの難しさがあると考えられる。

1 研究授業の前に模擬授業を実施していますか。



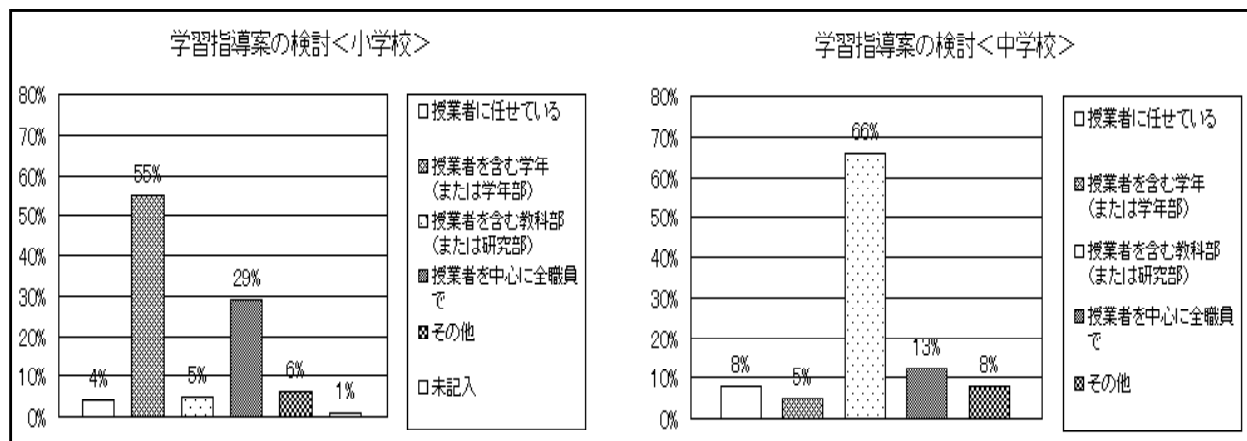
結果と考察	
小学校	中学校
<p><結果></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 4割近くが取り組む一方で、3割が実施していない。 <p><考察></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 実施している学校では、模擬授業の効果を授業力向上や授業の改善に結び付けようとしていることが推察される。一方で、「実施をあまりしない」「しない」という学校の中には、先行授業の実施を優先し成果を高めようとする試みを行っているところもあり、消極的な理由からのみではないことが考えられる。 	<p><結果></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 半数以上が実施しておらず、「あまり実施していない」を合わせると8割を超える。 <p><考察></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 時間の設定の難しさや、それぞれの教員が教科の専門であることから、他教科同士で見合う模擬授業の実施に至っていないと考えられる。

2 研究授業の前に先行授業をしていますか。



結果と考察	
小学校	中学校
<p><結果></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 模擬授業に比べ、実施されている割合が低い。「あまり実施しない」「実施していない」を合わせると5割を超える。 <p><考察></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 実施できない理由として「単学級」を挙げる学校が多かった。このことから、学校規模によっても左右されることが分かった。 	<p><結果></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 模擬授業に比べ、実施されている割合が高い。「実施している」「時々実施している」を合わせると4割を超える。 <p><考察></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 模擬授業に比べ、実施されている割合が高くなっている。教員それぞれが複数の学級を受けもち、どの学級においても同単元を扱うため、先行授業は比較的取り組みやすいと考えられる。

3 学習指導案の検討はどのように行っていますか。

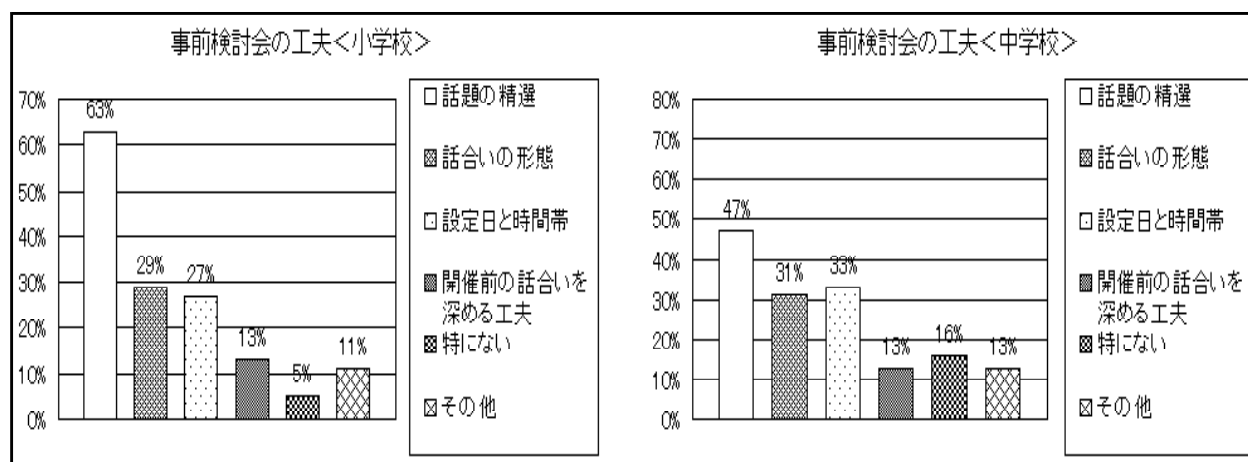


【その他の記述】（抜粋）

小 学 校	中 学 校
<ul style="list-style-type: none"> ・授業者を含む学年部と研究部 ・授業者と研究主任 ・授業者と教頭 	<ul style="list-style-type: none"> ・学年及び教科部 ・教科部または全員で ・職員を3つのグループに分けて ・授業者と研究主任の2人で

結 果 と 考 察	
小 学 校	中 学 校
<p><結果></p> <ul style="list-style-type: none"> ・「授業者を含む学年または学年部」が最も多いスタイルであることが分かった。「授業者を中心に全職員で行う」は、2番目に多いスタイルであった。 <p><考察></p> <ul style="list-style-type: none"> ・複数で学習指導案づくりを行うスタイルが一般的であることが分かった。 	<p><結果></p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業者を含む教科部が圧倒的に多い。 <p><考察></p> <ul style="list-style-type: none"> ・教科の専門性が高く、教科部以外での検討は難しいことが考えられる。教科を越えてはなかなか意見を話せないということもあると思われる。

4 学習指導案の作成は誰が行っていますか。

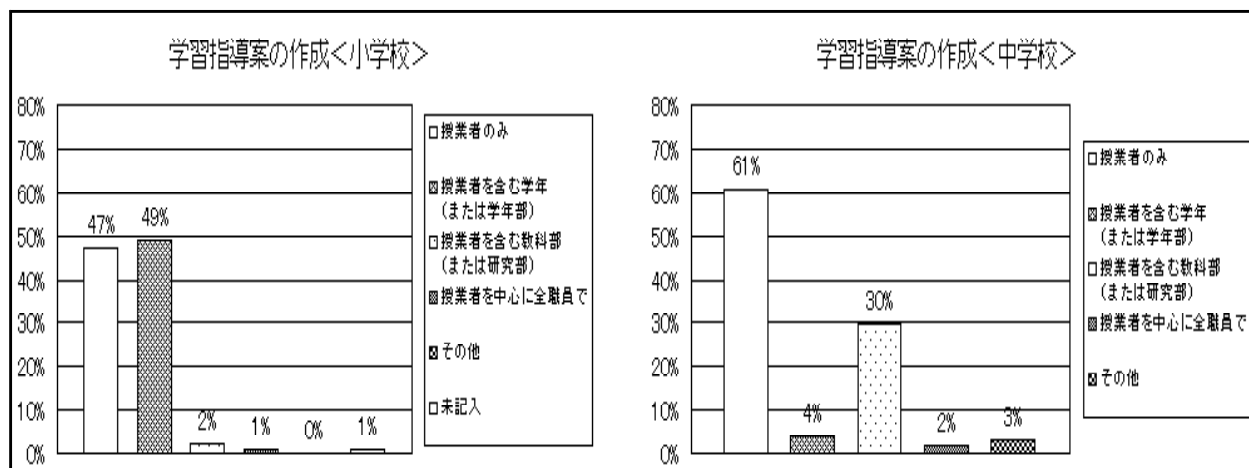


【その他の記述】（抜粋）

小 学 校	中 学 校
なし	<ul style="list-style-type: none"> ・学年及び教科部 ・学年や教科部で話合い後に全体で

結 果 と 考 察	
小 学 校	中 学 校
<p><結果></p> <ul style="list-style-type: none"> ・「授業者を含む学年または学年部」と「授業者のみ」で行われることがほとんどである。 <p><考察></p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習指導案の作成は、大まかに2種類で取り組まれていることが分かった。これは、学校規模や組織で行う時間設定が可能かどうかという点も関わるのではないかと推察される。 	<p><結果></p> <ul style="list-style-type: none"> ・「授業者のみ」が6割を超え、次いで「授業者を含む教科部」が3割との結果である。 <p><考察></p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習指導案の検討と同様、教科の専門性が高く、教科を越えて意見を出し合い学習指導案の作成に当たることが難しいと考えられる。

6 事前検討会の実施に当たって工夫していることは何ですか。

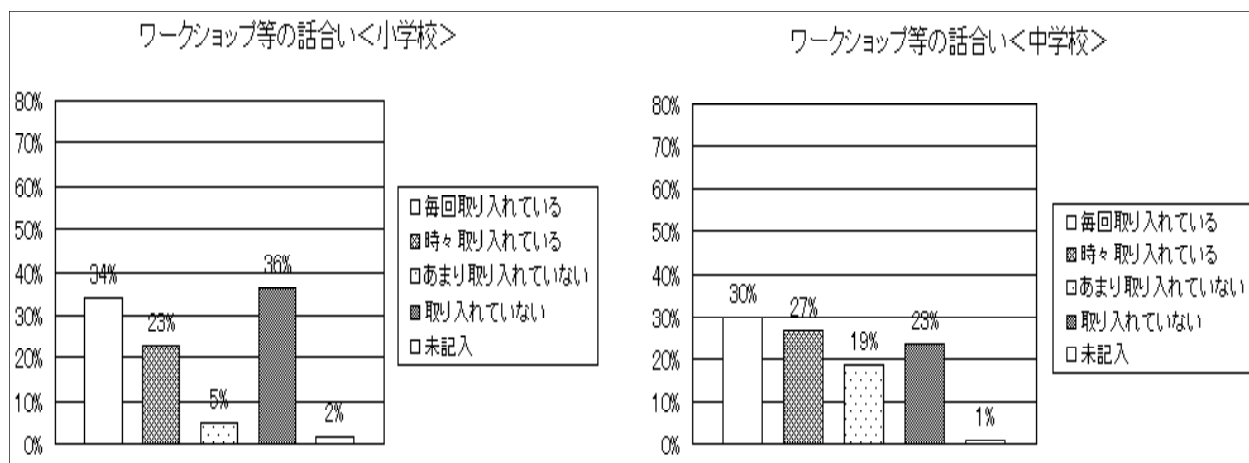


【その他の記述】(抜粋)

小学校	中学校
<ul style="list-style-type: none"> ・話合いの土台となる資料の活用 ・成果と課題を色分けした短冊に書き、視覚化する ・前回の課題を基に本時でどのように授業を組み立てたのかを授業者が伝える 	<ul style="list-style-type: none"> ・事前検討会を実施していない ・教科部で行う ・授業の進め方 ・主題、副題との関連を明確にし、視点を絞る

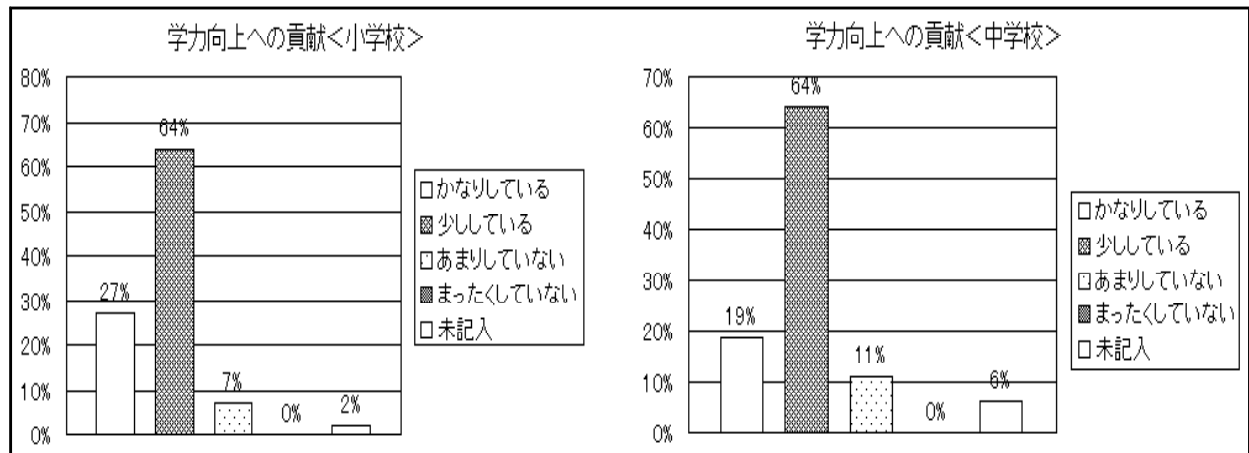
結果と考察	
小学校	中学校
<p><結果></p> <ul style="list-style-type: none"> ・「話題の精選」は、6割を越える結果であった。次いで、「話合いの形態」、「設定日と時間帯」の順に多いことが分かった。 <p><考察></p> <ul style="list-style-type: none"> ・工夫として挙げられた3項目から、時間設定に課題がある中で、「効率化」や「共有化」を意識して事前検討会が行われていることがうかがえた。 	<p><結果></p> <ul style="list-style-type: none"> ・「話題の精選」が約5割という結果であった。次いで「設定日と時間帯」「話合いの形態」と続く。 <p><考察></p> <ul style="list-style-type: none"> ・教科を越えて集まることから、「話題の精選」に難しさを感じている様子がうかがえる。「話合いの形態」も同様に教科の専門性から、話合いが活発に行われるように工夫されていると考える。また、部活動の関係からも時間設定は難しいと感じる。

5 研究授業を進める上でワークショップ等の話合いを取り入れていますか。



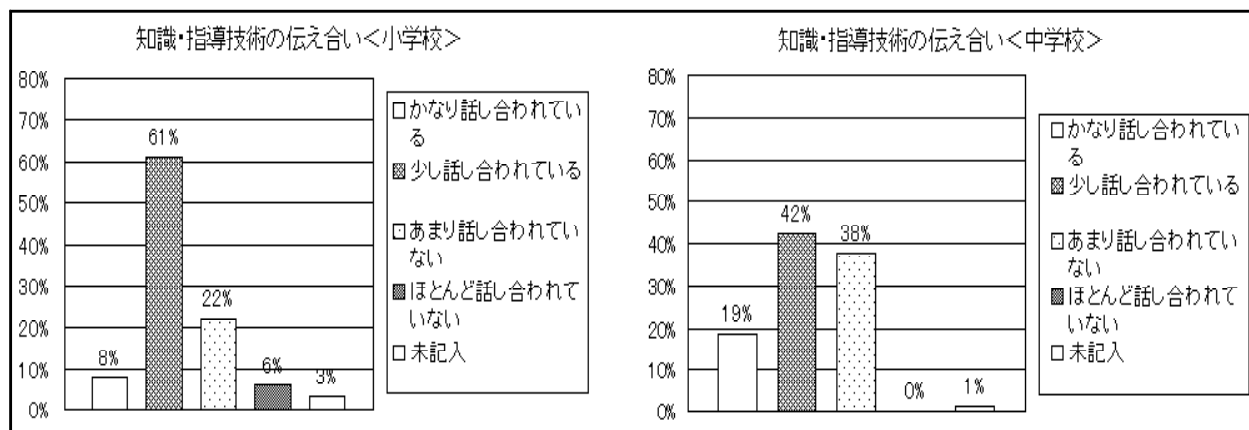
結果と考察	
小学校	中学校
<p><結果></p> <ul style="list-style-type: none"> ・6割に近い小学校でワークショップを何らかの形で取り入れていることが分かった。一方で4割近い学校で行われていない。 <p><考察></p> <ul style="list-style-type: none"> ・意見の出やすさからワークショップを導入している学校の広がりが徐々に進んでいることがうかがえた。一方で、まだ4割近くが実施せず、ワークショップを用いることが一般的であると言い切ることはできない。 	<p><結果></p> <ul style="list-style-type: none"> ・「毎回取り入れている」「時々取り入れている」を合わせると5割を超えている。 <p><考察></p> <ul style="list-style-type: none"> ・何らかの話合いを取り入れている学校がほとんどであると考え。その中でもワークショップ形式の話合いについては、意見を出しやすいということで取り入れる学校が増加しているのではないかとと思われる。

6 研究授業は児童生徒の学力向上に貢献していますか。



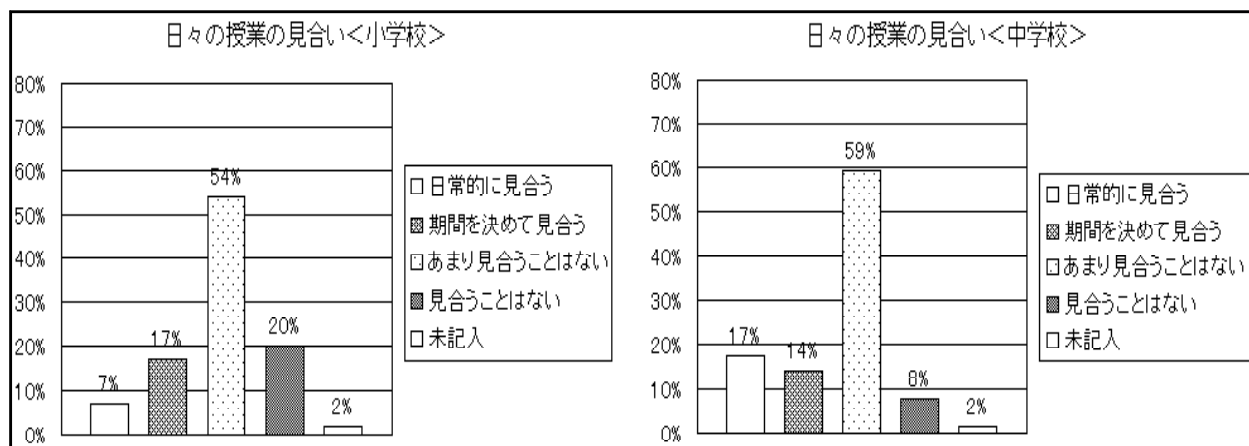
結果と考察	
小学校	中学校
<p><結果></p> <ul style="list-style-type: none"> ・学力向上に「かなり貢献している」と答えているのは、3割ほどである。 <p><考察></p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究授業は学力向上に資する取組となっているとうかがえるが、その根拠は児童の姿を主観的に捉えたものが多かった。そのことから、「少ししている」の回答が多くなったのではないかと推察する。 	<p><結果></p> <ul style="list-style-type: none"> ・学力向上に「かなり貢献している」と答えているのは、2割弱である。 <p><考察></p> <ul style="list-style-type: none"> ・自信をもって学力向上に結び付いていると言えない傾向がうかがえる。学力向上に結び付けていくための、研究授業の在り方を考えていくことが必要であると考え。

7 日常的な会話も含め教員間で経験に培われた知識・指導技術を伝え合う話合いがありますか。



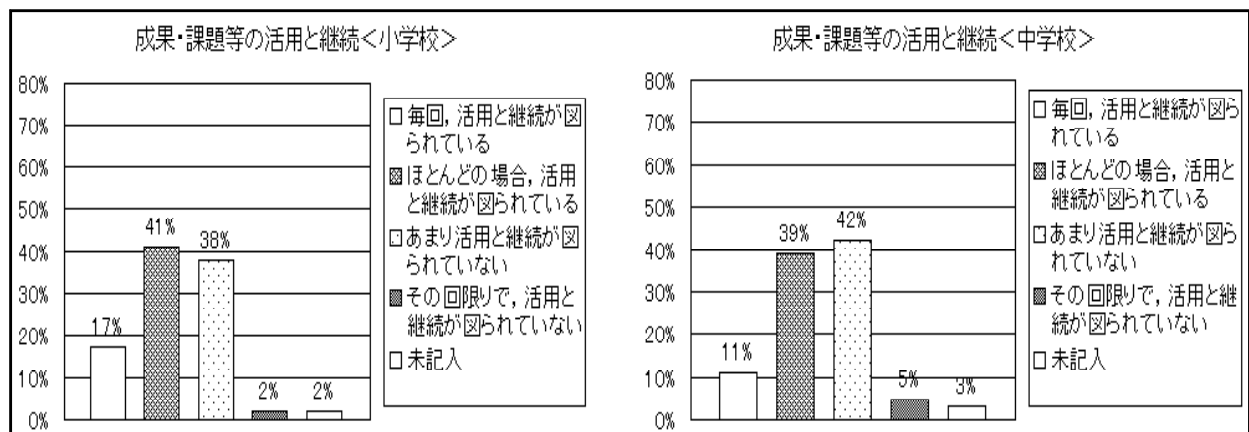
結果と考察	
小学校	中学校
<p><結果></p> <ul style="list-style-type: none"> ・「かなり話し合われている」と「少し話し合われている」を合わせると7割近くになる。 <p><考察></p> <ul style="list-style-type: none"> ・「かなり話し合われている」割合は1割に満たないが、コミュニケーションを図って授業力を高めたり問題解決を図ったりしようとしていることが「少し話し合われている」割合の多さから推察された。さらに、気軽に情報交換できることが望ましい。 	<p><結果></p> <ul style="list-style-type: none"> ・「かなり話し合われている」「少し話し合われている」を合わせると6割を越えているが、「あまり話し合われていない」も約4割である。 <p><考察></p> <ul style="list-style-type: none"> ・「かなり話し合われている」と答えているのは、2割弱である。多忙化が進み、時間がなかなかとれないということもあるかもしれないが、日常の中で気軽に情報交換できることが望ましい。

10 校内の研修の一貫として教員間で日々の授業を見合うことはありますか。



結果と考察	
小学校	中学校
<p><結果></p> <ul style="list-style-type: none"> ・「あまり見合うことはない」と「見合うことはない」を合わせると7割を超える。 <p><考察></p> <ul style="list-style-type: none"> ・互いに授業を見合うことが一般的になっているとは言い難い結果となった。時間的な問題も背景にあることが推察される。 	<p><結果></p> <ul style="list-style-type: none"> ・「あまり見合うことはない」「見合うことはない」を合わせると約7割である。 <p><考察></p> <ul style="list-style-type: none"> ・見合っている時間的な余裕がないということが一番の原因と考えられるが、空き時間等の活用を通して、見合い、個々の教員の授業力の向上を目指す取組にしてほしい。

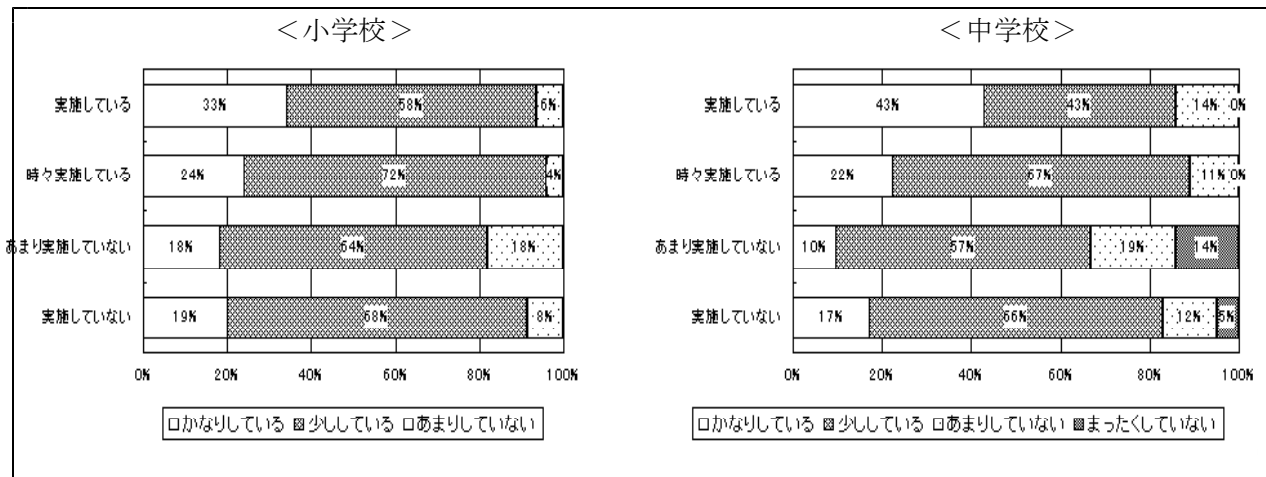
11 研究授業の成果や課題が次回の研究授業に引き継がれ、成果の累積や課題の解決につなげるように活用と継続が図られていますか。



結果と考察	
小学校	中学校
<p><結果></p> <ul style="list-style-type: none"> ・「毎回、活用と継続が図られている」は、2割に満たなかった。また、「活用と継続があまり図られていない」と「その場限りで活用と継続が図られていない」を合わせると、4割にのぼった。 <p><考察></p> <ul style="list-style-type: none"> ・「研究通信の発行」や「授業記録の累積」あるいは事後検討会で成果と課題を明らかにした点でとどまっていた学校でも継続理由としていたことから、成果と課題及び改善策を個の実践まで継続している割合は、実際としてもう少し低いと推察する。つまり、十分に活用と継続が図られている状態であるとは言えないと考える。 	<p><結果></p> <ul style="list-style-type: none"> ・「毎回、活用と継続が図られている」と答えているのは、約1割であるが、「ほとんどの場合、活用と継続が図られている」の答えを合わせると5割を超える。 <p><考察></p> <ul style="list-style-type: none"> ・「活用と継続が図られている」との答えが5割を超えているが、記述を合わせて考察すると、成果と課題を通信にまとめたことや資料としてファイリングしたことなどを活用と継続が図られていると捉えている面もある。十分に活用と継続が図られている状態であるとは言えないと考える。

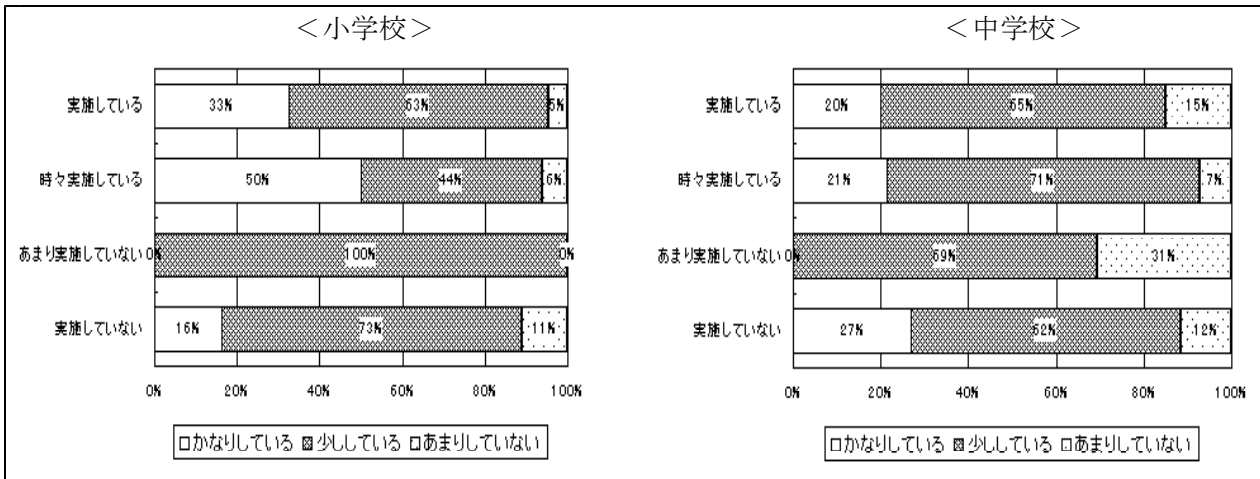
(2) 学力向上への貢献とのクロス集計グラフ

● 模擬授業の実施×学力向上



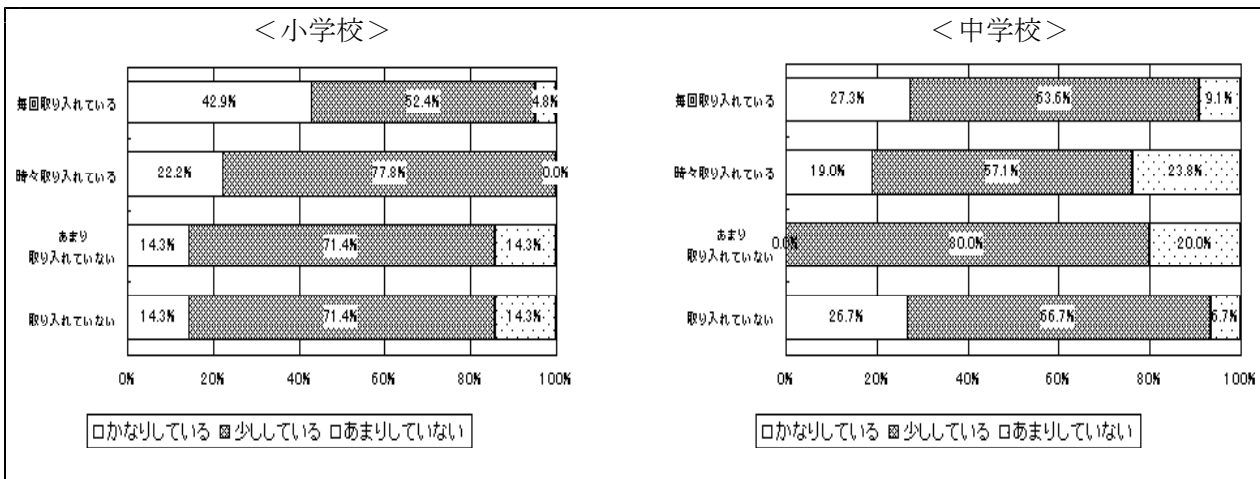
結果	<ul style="list-style-type: none"> ・小・中学校ともに、「研究授業が学力向上にかなり貢献している」と考えている学校の割合は、模擬授業を実施している学校の方が高い傾向にある。 ・中学校において、模擬授業を「あまり実施していない」、「実施していない」学校では、「研究授業が学力向上に貢献していない」と考える学校も見られる。
考察	<ul style="list-style-type: none"> ・模擬授業は、教員の授業力向上を図る上で有効な取組であり、授業者のみならず、その他の教員が児童生徒の立場に立つことで、授業づくりに対して授業者と対等に関わることができるため、実践的な研修による成果や課題及び改善策等を多数の教員で共有することができる。その結果、組織として授業の改善が進み、児童生徒の学力向上を実感する学校の割合が高まるのではないかと推察する。そのため、研究授業を行う際にはぜひ取り入れたい取組の一つであると考えられる。

● 先行授業の実施×学力向上



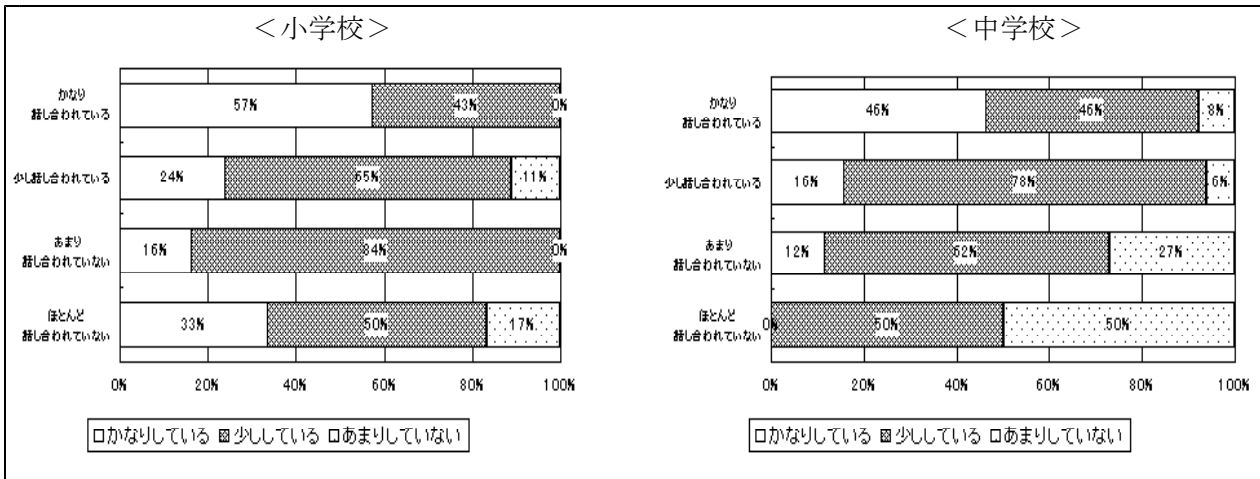
結果	<ul style="list-style-type: none"> ・ 小学校では、先行授業を「実施している」、「時々実施している」学校の方が「研究授業が学力向上に貢献している」と考える割合が高い。 ・ 中学校では、先行授業の実施の有無が「研究授業の学力向上への貢献度」を大きく左右しているとは考えにくい。
考察	<ul style="list-style-type: none"> ・ 先行授業は、小学校や単学級の学校では実施に工夫が必要である。一方中学校は教科担任制であり、単学級でなければ先行授業は比較的取り組みやすい。他の教員による協力がなくても個人で実践可能であることから、そこから得られた成果や課題及び改善策等が多数の教員で共有されるまで至らない場合も想定される。その場合、授業の改善は個人内にとどまり、学校全体として学力向上へ貢献しているとは言い難いと推察される。したがって実施する場合は、他の教員による授業の参観を伴ったり、同じ手だてによる授業実践を研究授業の授業者以外の教員が行い、授業者は参観者として参加したりするなどの工夫を行って、先行授業から得られる成果や課題及び改善策等を多数の教員で共有できるように計画する必要があると推察する。

● ワークショップ等の話し合い×学力向上



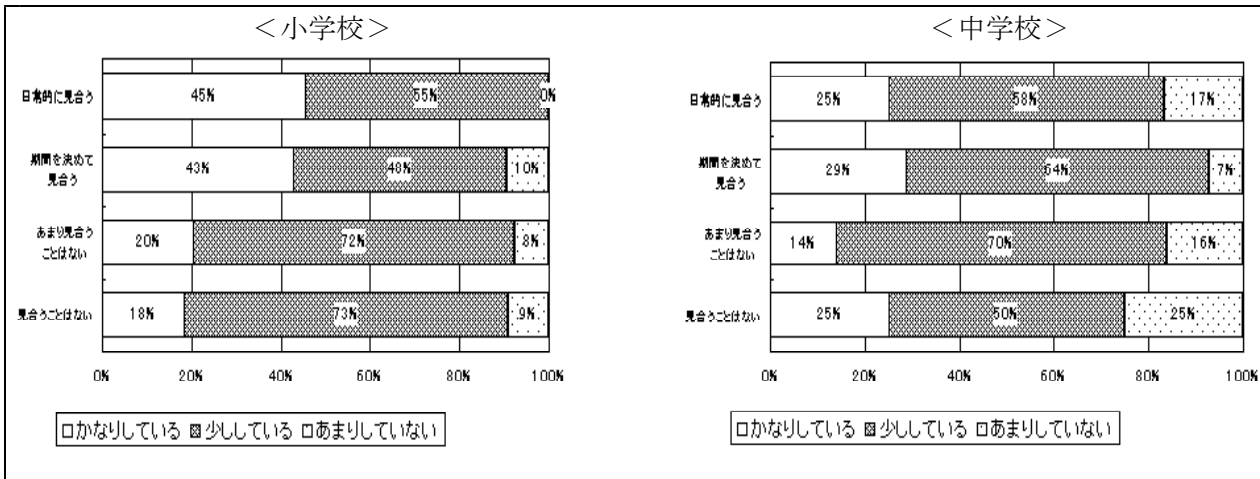
結果	<ul style="list-style-type: none"> ・ 小学校では、ワークショップ等の話し合いを取り入れる回数が増加するほど「研究授業が学力向上に貢献している」と考えている学校の割合も増加する傾向にある。 ・ 中学校では、有効度合いを測るまでには至らない。
考察	<ul style="list-style-type: none"> ・ 小学校においては学級担任制が主流であり、ワークショップ等の話し合いが共通の土台に乗り、話題の共有化が図られやすい。それに対し中学校は教科担任制ということもあり、学校全体として研究授業で学力向上を目指す上では、共通の土台作りが課題となると推察される。したがって、ワークショップ等の話し合いの導入に当たっては、共通の土台となり得るように話題を設定したり精選したりする工夫が必要であると推察する。

●知識・指導技術の伝え合い×学力向上



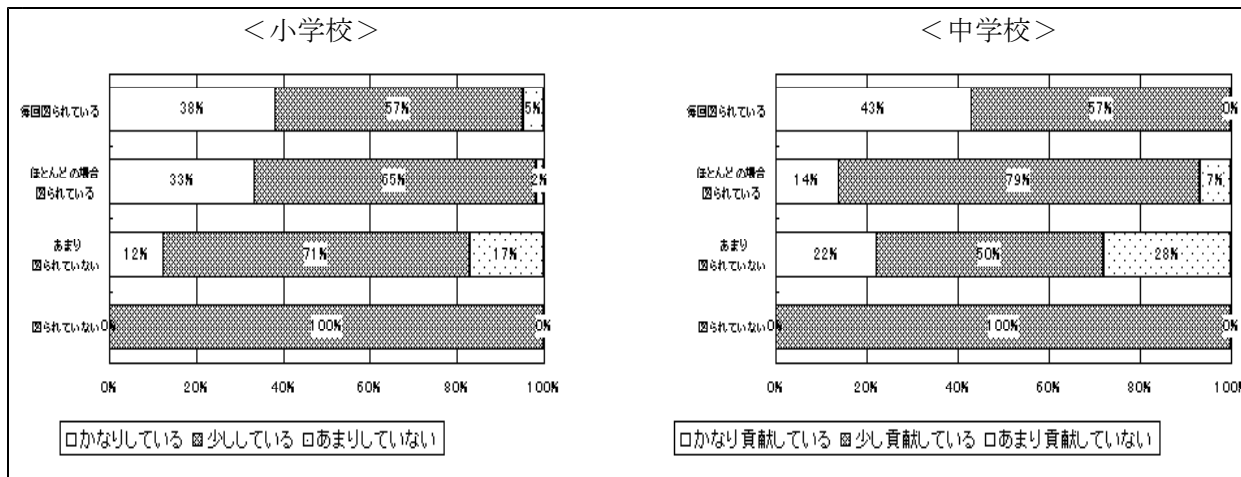
結果	<ul style="list-style-type: none"> 小・中学校ともに「教員間で知識・指導技術を伝え合う」ことに対する頻度の高まりに応じて「研究授業が学力向上に貢献している」と考えている学校の割合も高まっている。特に中学校においてその傾向が強い。
考察	<ul style="list-style-type: none"> 教員間で知識や指導技術を伝え合うことは、受け取る側の必要感が高まっている場面で行われることで特に有効に作用すると考えられる。中学校は担当教科の空き時間があることにより職員室内で教員間で話し合う機会が比較的作りやすい。一方小学校は唯一放課後がそのための時間となるが、実際には諸会議等が設定されている場合が多く、個人の必要感の高まりに効果的に対応できていない可能性も考えられる。知識や指導技術の伝え合いは、教員の授業力向上や授業の改善を進める上で有効な取組であることから、特に小学校では必要感が高まる場면을授業研究を利用して意図的・計画的に設定し実施することが重要であると推察する。

●日々の授業の見合い×学力向上



結果	<ul style="list-style-type: none"> 小学校では、日々の授業を見合う取組を行っている学校において「研究授業が学力向上に貢献している」と考えている学校の割合が高まる傾向がある。 中学校では、日々の授業を見合う取組を行うことと「研究授業が学力向上に貢献している」と考えることの関連性が薄い。
考察	<ul style="list-style-type: none"> 小学校では、授業を見合う取組を行う場合には、自分の学級や授業を自習にしたりするなど困難も多く、研究授業と関連付けて見る観点を焦点化した上で見合っていると考えられる。一方中学校の教員は授業の見合いを空き時間に行うことも可能であり、必ずしも研究授業と関連付けて見合っているとは言いがたい。そのため、この項目におけるクロス集計では関連性が見えにくいと推察される。したがって、日々の授業の見合いを取り入れる際には、ただ単に見合えばよいということではなく、研究授業との関連を図った上で、見る観点を焦点化して取り入れる必要があると推察する。

●成果・課題等の活用と継続×学力向上



結果	<ul style="list-style-type: none"> 小・中学校ともに、「成果・課題の活用と継続」が図られるようになることで「研究授業が学力向上に貢献している」と考える学校の割合が高まっている。 小・中学校ともに、「成果と課題の継続が図られていない」と考えている学校において「授業研究が学力向上にかなり貢献している」と考えている学校が皆無となる。
考察	<ul style="list-style-type: none"> 研究授業で得られた成果や課題及び改善策等が、学校全体として教員の授業力向上や授業の改善に結び付き、児童生徒の学力向上を実感として得るまでには、実践に生きる手だてを多数の教員間で共有し活用と継続を図っていくことが前提になると推察する。それは、授業研究で得られた成果や課題及び改善策等を書面やデータとして記録し、どの教員も閲覧可能な状態にすることにとどまらず、個々の教員が実際に日常の授業でその手だてを実践し、有用性を実感したり、さらなる改善を加えたりして再度もち寄って話し合うことでより高い効果が得られるものとする。